

〔研究ノート〕

ダーシー・マクニクルの『包囲されて』

——混血インディアンの自己探求——

西 村 頼 男

I 作者の略伝

II 作品の梗概

III 混血児の自己探求

I 作者の略伝

ダーシー・マクニクルは一九〇四年一月十八日にアメリカ合衆国モンタナ州のフラットヘッド・インディアン保留地^①で生まれ、七十七年十月十八日にニューメキシコ州アルバカーキで亡くなった人類学者、行政官、作家である。

彼は母方から先住民インディアン（クリー族）の血を引いており、父親（ウィリアム）はアイルランドの農民であった。母親（フィロウミーン）は、自分の子供たちに流れているクリー族の血はわずかに八分の一だという理由で、子供たちを白人として養育したいという願望を抱き、子供たちにインディアンの血が流れていることを忘れさせたかった。

マクニクルはフラットヘッド保留地で成長した後、ミッシェン・スクールと連邦政府の全寮制学校（チェマワ・インディアン・スクール^②）に在籍して、その後、モンタナ州立大学（一八九三年設立）で教育を受けた。彼はそこでは大学卒業の資格を取得しなかったが、指導教授の感化を受けて作家になりたいという願望を抱くようになった。その後、彼はニューヨークに出て、二五年秋には勉学の継続を希望してイギリスに向った。ところが、オックスフォード大学が、彼がモンタナ州立大学で取得した単位を認定しなかったために、彼はイギリスでの学位取得を断念して同年十二月にイギリスを去り、フランスに渡った。翌二六年五月までパリに滞在した後、ニューヨークに戻った。

学位を求める彼は二九年春にコロンビア大学に登録して、初めて本格的にアメリカ史を学び始めた。F・J・ターナー、V・L・パリングトン、ビアード夫妻などの歴史書を読むことで彼の西部への関心は高まった。しかしながら、彼のコロンビア大学での勉学は大恐慌のために未完に終わった。大恐慌発生ときには

ジェームス・T・ホワイト・カムパニーで編集と執筆の仕事に従事していたが、この頃から彼の執筆活動は本格的に始まり、『包囲されて』(一九三六)^③の初稿となる原稿を書きはじめていた。

大恐慌を身をもって体験したことが、資本主義を絶対視しているアメリカ社会を見直す契機となり、彼は、物質の獲得が成功の証となっているアメリカ社会には、自己中心主義でない新しい価値観が必要だと思ふに至った。その結果、彼が価値を見出したのは彼自身が逃げ出してきた西部と、そこに住み続けている先住民インディアンの生き方であつた。すなわち、彼の母親が彼から抹殺しようとした、インディアンであることの価値の再発見であつた。

やがて彼は三六年に連邦政府のインディアン対策局(BIA)の職員(行政助手)に採用され、三九年にはカナダで開催された北アメリカ・インディアン会議にインディアン代表団のひとりとして参加した。そして翌四〇年にはメキシコのバスクアロで開催されたアメリカ大陸インディアン協会(Inter-American Indian Institute)に参加し、四二年四月にはアリゾナ州セルのパーパーゴ族と同州ポストンの日系人収容所を訪問した。その後、サンタフェで三週間滞在して、野外調査のためのセミナーを受講した。四三年三月と六月にシカゴ大学で開催されたセミナーに参加した彼は調査の対象を南西部インディアン諸部族に焦点を絞るようになった。そして四四年夏、実際に南西部に赴き、ホピ、ナヴァホ、アパッチ、パーパーゴ族の指導者と会った。四六年八月には

インディアンの権利を認める組織であるインディアン請求委員会成立の法律署名式に出席した。また、四九年には、彼の最初の著書として『先にやってきたのは彼らだ』(They Came Here First)が出版された。五〇年、BIA局長がジョン・コリア^④(一八八四—一九六八)からデイルン・マイヤーに代わったが、マイヤーは日系人収容所の元所長であり、日系人とインディアンはその性状において同じだという考えの持ち主であつた。マクニクルはマイヤーの考え方には賛成でなかったが、職員を辞職せずにもう二年間、部族間調整係として残り、五二年から、一年間の休暇をとつた。

インディアン社会に関するマイヤーの基本的な考え方は先任のコリアーの反対であつた。すなわち、文化多元主義を嫌悪するマイヤーの考えはインディアンを白人の「主^{メイスン・ストリーム}流」に同化させることにあつた。したがって、マイヤーはインディアンとしてのアイデンティティの基礎となる保留地を減少させることに賛成であつたから、マイヤーBIA局長のもとでインディアンはさらに困難な状況に追い込まれていった。

マクニクルと南西部の諸部族の接触は以前からあつたが、マクニクル一家が西部へ移住して以後、両者の関係は深まった。彼は一九五四年にBIAを辞任して以後、ワークショッブに参加して、インディアンの自立を大いに援助することになった。そして、一九六一年に開催されたシカゴ会議の成功に向けて尽力し、その結果、インディアンの運動(レッド・パワー)は軌道に乗つ

た。マクニクル自身はカナダのサスケチワン大学で人類学の教授として教鞭をとるようになったが、腎臓に障害をきたし、七〇年にはオタワで心臓発作にみまわれた。同大学には七一年まで在職した。

彼は人生の最後の段階にさしかかると、死後出版となる『敵の空より吹く風』（二九七八）の完成に向けて六カ月をついやした。これは彼が四〇年間にわたって構想をねつてきた長編小説であり、彼のインディアン研究の総決算的作品であるが、その主題はインディアンと白人が互いに理解することの困難さである。

Ⅱ 作品の梗概

この小説は一九三六年に出版されたが、出版当時、読書界では全く話題にならなかった。この小説が、また、作家としてのマクニクルが批評の対象となりはじめたのは近年のことである。すなわち、先住民インディアンが政治的にレッド・パワーとして、また、文化的に認知されるようになってからのことである。以下において、この小説の梗概を最初に紹介する。

主人公アーチャイルド・レオンは一年ぶりに故郷のモンタナ州の保留地に戻ってくる。それは年老いた母親（キャサリン）との再会をはたすためであって、目的をはたした後は再び都会に出る予定である。しかしながら、彼は父親である白人（スペイン人）のマクスと再会することを恐れている。

アーチャイルドは連邦政府が推進している文化変容政策の一環である全寮制学校に在籍しているとき、教師からヴァイオリンの弾き方を習ったが、その芸が彼の身を助けることになった。彼は都会（オレゴン州ポートランド）でヴァイオリンの弾き手として舞台上に立ち、相当の金銭を稼ぐようになったことを自慢にして、保留地に戻ってきて母親にそれを見せる。

姉（アグネス）には二人の男の子（ナーシスとマイク）がいるが、夫は亡くなっている。そのために、アグネスは父親マクスのもとに身をおいているが、ナーシスとマイクはマクスにあたかも犬のように扱われている。それを目撃したアーチャイルドはマクスに改めて反発を覚えるが、自分の弟（ルイス）にも困惑する。ルイスは白人から馬を盗むことが手柄だと思いう旧弊なインディアンであって、身近にいながら、母親に心配をかけている若者である。ルイスには馬泥棒の嫌疑で五〇〇ドルの懸賞金がかかっており、追跡されている。

モンタナ州周辺に長らく住んできたインディアンといえばセーリッシュ族である。そのセーリッシュの族長（ランニンング・ウルフ）の娘であるキャサリンは、招かれてこの地にやってきたエズス会の神父から洗礼を受けて、「忠実者キャサリン」という名前と呼ばれるようになった。しかしながら、彼女は今、人生の最終段階にきて、混乱している身の回りを見つめている。夫マクスは四〇年以上前に、一八七〇年に、この地の美しさに魅了されて、それまでの放浪生活に終止符を打って、この地に定住して彼

女と結婚した。彼女は十一人の子供を生んだが、今ではマクスを信用せず、また、英語が理解できない振りをしている。

そんなキャサリンにとってアーチャイルドの帰郷は嬉しい出来事であり、親戚と友人を招待して、宴を開催する。その宴の席で、都会生活によって成長したアーチャイルドは部族の年長者たちから、ほとんど絶滅したバッファローのことや昔話を聞かされて初めてインディアンとしての認識を明確に抱きはじめる。その場には盲目の古老モデステもいる。また、彼はアグネスの子供たちに魚釣りを教えたりしているうちに、この生活に溶け込み、収穫期を迎えているマクスの畑で自発的に働くようになる。

季節は秋、九月。アグネスの子供たちはミッシオン・スクール（寄宿学校）に戻らなければならない時期であるから、マクスは子供たちを騙すようにして自動車に乗せて学校へ連れてゆく。

キャサリンは人生最後の儀式として山に行きたいと願い、アーチャイルドがその供をする。山に入った二人は偶然にルイスと出会う。その後、母子三人と出会った鳥獣保護官^{ゲーム・ウエイデン}は、ルイスがメスの鹿を殺したのは法律違反だと告げるが、ルイスはその法律はインディアンには適用されないと主張して、木にかけてあった銃に手をかける。すると、身に危険を感じた保護官はルイスを射殺する。次に、わが子を殺されたキャサリンが伝統的な武器である斧で保護官を殺害し、アーチャイルドは母親と協力して保護官の死体を埋めた後、二人は山を降りる。その後、彼はインディアン^{ジント}担当官のパーカーから保護官の行方不明の件で嫌疑をかけられる。

マクスは肺炎のために意識が混濁して死の床につくが、牧畜場をアーチルイドに与えるつもりである。山での事件後、キャサリンは教会のクリマス・ミサにも復活祭のミサにも欠席して、再びインディアンに戻る。

一方、アグネスの子供たちは学校で厳しい体罰として、暗室に長時間閉じ込められたために、暗闇を恐れるようになっていく。特にマイクはその後遺症に苦しめられ、家に戻っても暗闇を恐れて精神が正常でなくなっている。

キャサリンは臨終を迎えるが、神父を呼ぶことを拒否して、古老モデステを呼んでくれとアーチャイルドに頼む。神父はアーチャイルドが山で起きた事件を担当官に説明するように説くが、彼はそれに従わない。

アーチャイルドと親しくなった部族の若い女の子（ラ・ロンド・エリーゼ）はアグネスの二人の子供も連れて、四人で山に向かう。そこでアーチャイルドは保安官と出会い、殺人事件のことで追求される。すると、エリーゼは彼を救うつもりで保安官を射殺するが、その場に担当官とインディアンの警官⁶が現れて二人は逮捕される。

Ⅲ 混血児の自己探求

イギリスから独立して新国家を樹立した白人は対インディアン関係において、インディアンを「息子」と呼び、自らを「父」と

し、大統領を「偉大なる父」と呼ぶことで巧妙な隷属関係を構築した。白人は「父」としてインディアン諸部族の相違や独自性を無視して、「息子」であるインディアンを支配しようとした。

連邦政府およびキリスト教界はインディアンを野蛮と断定したが、それは白人の優位性を主張し、領土の略奪を正当化するためであった。ウンデッド・ニーの虐殺⁷のような、自分たちが行った数多くの残虐な行為を正当化するためにインディアンを「悪魔」と呼び、自分たちの領土拡大の欲望を充足するために西部開拓は自分たちの信じるキリスト教の「神」から与えられた「明白な運命」だと詭弁を弄した。このようにして白人はインディアンを絶滅の危機に追いやり、一九世紀末から二〇初頭には文字とおりに絶滅するところであった。

白人がインディアンを絶滅の危機に追いやることに成功したのは、インディアンの意向を完全に無視した、きわめて「人道主義的な」文化変容政策の強引な実施の結果であった。その政策の基本はインディアンを部族の伝統から立ち切り、総てにおいて白人中心の「主流」に同化させることであった。具体的には土地の個人所有（すなわち、土地の商品化）、部族宗教の禁止（すなわち、キリスト教への強制的改宗）および、学校教育の強制である。学校教育においては部族言語の使用禁止（すなわち、英語使用の強制）とキリスト教の強制が大きな柱であった。政治と宗教が一体となってこれほどに長期間にわたり、かつ、広範囲にわたり猛威をふるった例は稀であろう。

作者はこの小説においてこのように文化変容政策が強引に進められた時代に生きる混血の若者の姿をいきいきと描写した。

まず、アーチャイルドが示す白人の文化への同化を検討しよう。ヴァイオリンの弾き方を習得する例が示すように、彼は最初、何の抵抗もなく白人の文化を受容する。彼が音楽という国境や文化の相違を越える媒体を通して白人社会に入ってゆく意味はそれなりにあるが、より重要なのは彼が若者らしく、ポートランドという大都会にあこがれてインディアン社会と保留地を後にする事実である。そして、彼がポートランド^{シヨウ・ハウス}の劇場でヴァイオリンの弾き手として賃金を稼ぎ、資本主義社会で通用するインディアンの若者に成長した時点からこの小説は展開する。

彼が白人の文化を内面的にも外面的にも受容している様子は小説の冒頭で明確に描写されている。すなわち、彼は一年ぶりに故郷に戻るに際してスーツ、シャツ、革靴を新調するが（二ページ）、これは彼が白人社会での成功を自慢している証拠である。さらに、母親に稼いだ賃金を見せる場面（二ページ）は資本主義社会での成功談以外の何ものでもない。

彼は白人の資本主義的価値観を受容したばかりではなく、故郷に戻っても彼の意識はインディアンの過去（歴史）とはつながっておらずに、逆に白人の建設した都会と密につながっている。彼は帰郷後、母親の求めに応じて一緒に山に行くが、その折、彼は山中の眺めの彼方に都会の光景を思い起こす。すなわち、山中での夜、空には星が瞬いている。よく見れば、草の上にも星が草の

先端に氷状になった露が瞬いており、フクロウが呼び交わしている。この山の夜は歳月を経ても不変である。それから、彼の心でイメージの転換が起こり、彼は人々が街路を、大きな部屋の中を動いている大都会の光景がきらりと光るのを見る。彼は別の世界の光と音と匂いを思い起こすと、山の過去も現在も彼の関心を引かない。彼は自分の故郷を風変わりな所と感じる（二二—二三ページ）。

小説全体の三分の一の箇所でこのように語られていることは、彼の帰郷時の心境と一致している。すなわち、彼は昔日の狩猟生活などを懐古して帰郷したのでもなく、山を訪ずれたのでもない。

彼にとって根源的な問題は、彼が白人の文化を受容し、都会生活を体験してしまったという、拭い難い事実であり、この体験を消し去ることは絶対にできない。

このように白人が推進する文化変容政策はアーチャイルドにおいて確実に結実している。しかしながら、彼が保留地＝母親のもとに戻ると決意し、実行した時点から彼のインディアンとしてのアイデンティティは少し目覚めはじめる。彼が帰郷してまず会うのは母親である。母親はインディアン伝統的な住まいであるティピーにひとり住んでいるが、彼はその中で母親と一年ぶりに対面する。その対面時の彼の心の動きは次のように描写されている。

彼らはしばらく黙ったまま座っていた。ヴァイオリン弾きのことを話題にするのはむなしかった。アーチャイルドはそれと同じほどにむなしい話題は少しの間考えつかなかった。インディアンである母親のもとに戻ってきたら、世界が違うのだと思いださなければならぬ。いずれにしてもお金を見せびらかしたり、自分のことを喋るために戻ってきたのではない。魚釣り、乗馬、山登り——もう一度やつてみたいと願っていたことがある。どうしてヴァイオリン弾きの話などするのか？（二三ページ）

まずアーチャイルドが久しぶりにティピーに入ること自体が象徴的行為であるが、それは多弁な白人社会から沈黙の価値を評価するインディアン社会に戻ることである。そして、一旦インディアン社会に戻ったら、ヴァイオリンを引ける能力もヴァイオリン弾きとして得る賃金も自慢の種ではなくなる。自己を語ることもむなしい。こうしてアーチャイルドにおいて根本的な価値の転換がはじまる。

作者は先に引用した部分において簡潔に、アーチャイルドが受容した白人社会の特質がインディアンの社会では価値がないことを告げている。また、アーチャイルドは所期の目的を達成すれば再び故郷を出て都会へ向い、ヴァイオリン弾きとして生計を立てることもできる。彼にその自由はあるが、彼はすぐにはその自由を選択せずに、最終的には彼の意志に反して故郷に留まることに

なる。その最初の契機は小さな事態の発見である。

姉の子供たちは魚釣りができない、と母親から聞かされたアーチャイルドは子供を捕まえてそれを確かめる。すると、子供たちは商店で売っている釣り道具がないから魚釣りができないと返答する。しかしながら、考えてみれば、自分の食料を自分の手で得られないことほどにインディアンの伝統から外れた事態はない。子供たちは明確に意識していないが、この事態はインディアンとしての生存そのものが危険に晒されていることの象徴であり、また、商業（資本）主義と文化変容政策の浸透の結果でもある。

アーチャイルドは小川の傍らで丸太に腰かけることにより、自分水の音やフクロウの泣き声、キイチゴや石ころの匂いに誘われて故郷に戻ってきたのだと気づく。最初の帰郷の理由は母親にもう一度会うためであったが、今や母親個人とのつながりを越えて、あるいは、その繋がりを媒介として、故郷の自然とのつながりを再確認することになる。白人の文化に同化したアーチャイルドは帰郷することによって少しずつ確実に自己を発見してゆくが、それは簡単に一直線には進まない。大きな課題が残っている。それは父親との確執である。

マクスは四〇年以上も前にこの地に定住することを決心したが、それはあくまでも白人として彼個人の願望を充足したにすぎない。彼がスペイン人であることは、南北アメリカ大陸を探検し、財宝をスペインへ持ちかえった征服者たちの末裔であることを示しており、アーチャイルドはまず、この父親と対決しなければ

ばならない。

帰郷したばかりのアーチャイルドの気持ちは父親と対峙するにはなお以前と同様に、脆弱である。父親から強い言葉をひとつと、ふたこと浴びると彼は挫折してしまふところであるが、かうじて、「あんたに寄食するために戻ってきたのではない」（七ページ）と言いきることで最初の試練を乗り越える。しかしながら、白人が否定するインディアン性の価値を見いだしつつあるアーチャイルドに対する執拗な攻撃は容易に収まらない。アーチャイルドが姉の子供たちとともに畑を横切る姿を目撃すると、マクスは「お前は再び部族の者になったのか」と皮肉る。そして、アーチャイルドから「魚釣りにゆくのだ」という返事を聞くと、マクスは「来週にはケット（インディアンの外敵）の生活に戻っていることだろう」と皮肉を続ける。ここでアーチャイルドは最後に「だから、どうなの？」と切り返すことで自立をさらに一歩確実なものにする（二四―二五ページ）。

ヴァイオリン弾きとして生計の糧を身につけることによって経済的自立をはたしたアーチャイルドは「父―息子」の隷属関係を立ち切りはじめるが、次にはたすべき目標は白人のインディアン像からの解放である。

アーチャイルドの弟ルイスは飲酒に浸り、馬泥棒を自慢にする昔ながらのインディアンである。これは白人が抱くインディアン像の典型であるが、アーチャイルドは自分はこの古いイメージから脱却する決意だと姉に向って告げる（二五ページ）。さらにマ

クスから、「賭博をやらないインディアンとは、お前はどんなインディアンか」（二二ページ）と皮肉を言われるが、彼は動揺しない。

次にアーチャイルドがマクス（白人）との隷属関係を立ち切るうえで重要な行為は資本主義的価値観の否定である。母親がアーチャイルドの帰郷を祝福して開催してくれた宴に参加することで、彼は母親にますます接近して、マクスに対する恐怖心も薄らぐ。そして、秋の収穫時になると彼は自発的に収穫作業につく。それに驚いたマクスは労働の対価を支払うと申し出るが、アーチャイルドは労働の対価を求めて作業したのではないと、その申し出を辞退する。彼はマクスの資本主義的労働観を根底から否定することによって、隷属関係を根幹からゆるがす。そして、やがてマクスが亡くなることで、アーチャイルド（息子＝インディアン）はスペイン（父＝白人）の支配から完全に解放されることになる。

アーチャイルドがインディアンとしての自己を探求するうえで、資本主義的な価値観以上に脱皮しなければならないのはキリスト教の影響である。白人はキリスト教信仰における「父－息子（神－イエス）」関係を巧妙に「白人－インディアン（父－息子）」にすりかえることによって、キリスト教をインディアンに強制し、浸透させようとした。しかしながら、アーチャイルドは母親の場合よりもキリスト教から容易に解放される。その契機は皮肉なことにかトリックの神父が準備してくれる。

マクスの畑で収穫作業を手伝っているアーチャイルドに或る神父（クリスタドル）からヴァイオリン共演の誘いがある。クリスタドル神父は宗教家らしくない様子をしており、練習は教会の会堂で一週に二度行われる。子供の頃は、雲の形が十字形になったというところでアーチャイルドたちを膝まづかせた神父もいたために、子供の頃の彼は会堂で恐怖心を植え付けられた。ところが、今や、会堂はたんなる空間と見えはじめる。

彼は壁に描かれたテンペラ画にがっかりした。祭壇に向って膝まづかないで中央通路を横切った最初のとき、彼は寒気をおぼえた。……（しかし）何も起きなかった。その思い切った振るまいは拍子抜けだった。子供の頃の無条件な信心は静かに消えてなくなった。それから、聖具室を見つめなければならなかった。もはや彼は何物にも畏怖を覚えなかった」（一〇四ページ）

アーチャイルドはこうして彼なりに自己探求を深化する。一度受容した白人の文化（ヴァイオリン演奏）を、こゝにして経済的自立を達成することで、「父－息子」関係を隷属関係として維持したいというマクスの意図を挫折させる。さらに、アーチャイルドは資本主義的労働観によせるマクスの信奉をゆるがし、白人の抱くインディアン像の修正をせまる。宗教の面では、彼はキリスト教界による「父（白人・神）－息子（インディアン）」関係から

解放されてゆく。

作者の考えでは、インディアンの若者が自立するには教育が必要である。教育の重要性は作者自身が大学卒業の資格を取得することに拘泥した伝記的事実が証明している通りである。また、最後の作品『敵の空より吹く風』でも、リトル・エルク族の将来を担う若者（アントワン）も教育を受けている。この作品においてアーチャイルドは教育を受け、経済的自立を達成して初めて父親、資本主義的価値観、キリスト教のいづれからも解放される。しかしながら、その解放だけではアーチャイルドの自己探求は完成からほど遠い。すなわち、彼が自分の身体に伝わっているインディアン性に気づく必要があるが、それを援助してくれるのは母親とモデステである。母親が開催してくれた彼の帰郷を祝う宴の席で、年長者たちは今は絶滅したも同然のバファローの話を彼に語ってきかせる。しかしながら、それに対する彼の反発はいかにも若者らしく、いなくなつたバファローをめぐる話には関心を示さない。また、宴の席に列なっているひとりの叔母は、キャサリンが白人男性と結婚した衝撃から立ち直おれずに、アーチャイルドに向つて、「昔だつたら、あんたの母さんはあんなことを恥だと思つたことだろう」という。すると、彼は苛立ちつつ次のように抗弁する。「みんなは、あたかも昔が今ここにあるように話す。だけど、昔は過ぎ去つて、もはや跡形もない。だから、昔のようになるために、僕がどうすべきかとお説教するのは止めて欲しい」（六三ページ）。アーチャイルドのこの主張に耳を傾けてくれ

るのは古老モデステである。モデステは白人の到来によつて時代が激変したことを知っているから、「われわれの声は弱くなつた。昔のように話していたのでは聞いてもらえない」（七三ページ）と述べる。アーチャイルドが母親のティビーで感じたように、寡黙（沈黙）はインディアンたちの間では意味があるが、白人の前では、寡黙は不利な結果を招くことをモデステは知っている。

帰郷したアーチャイルドが再び都会（白人の世界）へ向うことを父親に示唆しながらも（九六ページ）、この地をすぐには去らない要因のひとつはこの自然とのつながりである。その自然こそが、この「空の青さ」（五ページ）こそが彼と姉の子供たちを結びつける。その自然は、罰として寄宿学校の暗室に長時間閉じ込められたために精神に異常をきたしたマイクを癒してくれる。自然がインディアンにとつていかに大切であるかはアーチャイルドが帰郷を描写した場面から繰り返し述べられている。

しかしながら、アーチャイルドは総ての桎梏から解放され、自然の恵みに浴するわけではない。彼はたしかに経済的自立を達成し、インディアンであることの意味を解しはじめるが、彼には鳥獣保護官を殺害したという嫌疑をかけられており、最後には逮捕される。

保安官のデーブ・クイグリーはこの地のインディアンに劣らず、山の地理・地形をよく知っており、かつ、法の番人である。彼は鳥獣保護官の行方不明と、当日のアーチャイルドたちの行動は関連があると見破っている。この小説の結末で、彼はアーチャ

イルドを殺人容疑で逮捕する直前にエリーズに射殺されるが、法が厳然とアーチャイルドたちの前に存在する。インディアン担当官のパーカーは二人が逮捕される際に次のように述べる。「お前たちは逃げられないのだといつになつても覚えなければほんとうに困ったことだ——哀れをさそう」(二九七ページ)。

マックスの友人であり、インディアンを取り引き相手とする商人のモーズーも(二七ページ)、カトリックの神父も(七八ページ)アーチャイルドを文化変容政策の成功例と見なすが、アーチャイルド自身は結局、手錠をかけられてこの小説は終わる。未来を担うはずの若者には自由は拒否されているが、否定的要素は他にもある。この自然(山)はもはや荒々らしい野生を備えておらず、動物も激減している。激減した動物に代わって山にいるのは白人であり、それも二人の法の番人である。山はすでにインディアン⁽⁸⁾の聖なる場所ではなくなっており、山は法の番人の存在によつて政治性を帯びてしまっている。

作者はこの小説において、インディアンとしての立場を取り切れない混血児の姿を描いている。彼の動揺する心は、収穫を手伝い終わつたときに、ここに自分の求める生活(音楽の勉強)がないから、再び出て行くと父親に向つて言い切る場面(九六—七ページ)に現れている。また、すでに言及したように、故郷を風変わりな所と感じている。しかしながら、結局、彼は母親の犯した殺人事件が原因で逮捕され、彼の希望は実現しない。

最後に、この作品に対する批評家たちの評価を紹介しよう。こ

の小説は手法的に優れているという評価がある一方で、現代インディアン文学の理論家であるポーラ・G・アレンの評価はきわめて厳しい。彼女によれば、マクニクルの作品に描かれるインディアンは、非インディアン作家によつてつくられるインディアン像と同じである。すなわち、アレンはマクニクルがインディアンを犠牲者として扱っていることを批判し、この小説の結末はインディアン⁽⁸⁾の絶滅に寄与する植民地主義者の解決であると結論づけている。また、この小説はきわめて宿命論的であるとも述べている。アレンの理論によれば、マクニクルが作中において、伝統的な儀式を通して主人公が自己を確立するようにさせていないことに自己探求の不十分さがあることになる⁽⁹⁾。

注

- (1) モンタナ州西部にあり、面積は一、二〇〇、〇〇〇エーカー。
- (2) 一八八〇年設立。連邦政府によつて保留地外で設立された全寮制学校としては二番目に古い。
- (3) D'Arcy McNickle, *The Surrounded* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1978) 以下、本文中における引用は総てこの書物による。ページ数をのみ記す。
- (4) 一九四六年に発足、七八年に廃止された。この委員会は、合衆国が過去に不当な形でインディアン諸部族から取得した土地等に対する補償を、当該部族に対して行うために裁定作業をその任務とした。上田伝明著『インディアン請求委員会の研究』(法律文化社、一九七九) 参照。
- (5) 一八八四—一九六八。一九三三年から四五年までインディアン対策局長を務め、合衆国のインディアン政策の転換に大きく貢献をした。
- (6) インディアン警察はインディアン犯罪裁判所とともに「法を、治安維持と財産の保護のためばかりでなく、文化変容の進行を促す積極的な

手段として利用するための機構であった」(W・T・ヘーガン著、西村頼男・野田研一・島川雅史訳『アメリカ・インディアン史』(北海道大学図書刊行会、一九九八年、第三版、一八二―八三ページ)。一八七八年、連邦議会ははじめて資金を承認した。

- (7) 一八九〇年十二月にラコタ・スー族保留地で起きた事件。連邦軍が無差別に発砲して、約三五〇人中二五〇人のインディアンが殺害され、負傷した。J・ムーニー著、荒井芳廣訳『ゴースト・ダンス』(紀伊国屋書店、一九八九) 参照。

- (8) Robert Holton, "The Politics of Point of View: Representing History in Mourning Dove's *Cogewea* and D'Arcy McNickle's *The Surrounded*" *Studies in American Indian Literatures* 9-2(1997), p.74.

- (9) Paula Gunn Allen, *The Sacred Hoop: Recovering the Feminine in American Indian Traditions* (Boston: Beacon Press, 1989) pp.84-5. この小説に登場するインディアンたちが運命を自分の力ではいかんともできない、というところは他の批評家も認めている。Louis Owen, *Other Destinies: Understanding the American Indian Novel* (Norman and London: University of Oklahoma Press, 1992), p.66.

(二〇〇三年七月十八日受付)